

1

次の文章を読んで、①～⑧に答えなさい。

科学と融合した現代技術は、現代社会それ自身を構築するだけの力を持つにいたった。それは、教育、労働の形態などから、食事の形態に至る広範囲な日常的^①場面で、要するに生活者の生活空間そのものを大きく変えてしまったし、変えつつある。利便性、快適性、効率の良さなどを過去の生活空間と比較すれば、私が生きて経験してきた六十余年のなかでさえ、ほとんど比較を絶するほどである。

過去における技術は、生活空間のなかで、限局された働きを持っていった。職人集団は閉鎖的であったが、技術の成果の大半は、生活の一部に関わるだけで、しかも、それは目に見える形をとるのが普通であった。食器その他の道具類も、使いこなすのに特に注意は要らず、修理も日常的な範囲で、自分でもできないわけではなかった。②

治水、灌漑^{かんがい}のように、大規模な行政的な力を必要とする技術も社会の重要な要素ではあったが、それとても、生活者のサンカク^③がある程度は可能な形でつくりられ、維持されていた。

しかし、今日の生活空間のなかでの技術は、全く異なる姿をしている。晩年の本田宗一郎氏が寂しそうに洩らした一言が忘れられないのだが、本田氏は、「自分のところで作っている車、もう俺にはわからないんだ」と言ったのである。あの自動車技術の権化^{ごんげ}のような本田氏に明確には読み取れないような車のメカニズム。それは今日の生活空間のなかに浸透している技術の象徴のように思われる。

一言で言えば「④は見えなくなっている」のである。それは具体的には、次のような事態になって現れている。例えば修理である。目に見えるメカニズムでは、故障の箇所がどうなっているか、部品が摩耗したのか、ソクシヨウ^⑤したのか、……を目で確かめることができ。その対応策も、応急の処置も、「目」で見当がつく。しかし、例えば、現代の車の修理は、主としてコンピュータ制御の部分が多いからなのだが、そうした「見える」故障に関わるものではなくなっている。ある部分からある部分までを、ただパックにして交換するほかはない、というのが普通である。本田氏が「わからない」と言われたのも、その点だったと推測される。

これは非常に皮相的な現象の面であるが、このような事態は、より根元的な形で、われわれの前にある。われわれの生活空間そのものが、上で言うような車に⑥した状態になっている。われわれが便利さを享受している製品の生産現場、あるいはそれを稼働^{かどう}させるために必要な電力の製造、供給の現場、こうしたものは、われわれ生活者の目にはいっさい触れないようになっていく。われわれは、いつ、誰が、どのようにしてつくったのか、明確なイメージぬきに、ただスイッチをひねれば、電気が使え、水が出る、ゴミもまとめて出しておけば誰かが処理してくれる、という形でしか、技術と向き合えない状態におかれている。

そうした状況のなかで、われわれの生活空間は、われわれの真の望みが何であるか、という問いかけを発しないままに、ひたすら技術の所産を受け入れ、それによって、変わっていくという状況にある。

しかし、そうであつても、いや、そうであればなおさら、われわれは、われわれの生きるこの空間の在り方に、そしてその未来の在り方に、責任を感じなければならぬことになる。科学や技術は、われわれの生活空間そのものなのであり、それは、どこかで用意されて強制的に与えられたものではなく、やはりわれわれ自身がつくり出してきたものである。「見えない」ほどにすっかり空間の要素となつてしまつたとしても、われわれは、それを見据え、われわれの意志で管理していかなければならない。

そのためには、生活者一人一人が、まず「目」を逸らさずに「見よう」とすることから始めなければならぬ。「見る」ためにはそれだけの眼力が必要である。理工系は理工系の話と、非理工系の人々がその目を向いては眼力は育たない。理工系の人々が、自分たちの生きる社会のことに関心を持たなければ、ここでも「眼力」は育たない。

これほど切実にわれわれの生に介入し、われわれの生を規定し、われわれの生を造り、われわれの生そのものとさえなりお世話した科学／技術は、われわれ自身の責任として、われわれすべてが背負うしかないであり、その意識こそが、未来のわれわれの子孫に対して責任を果たす第一歩になるだろう。

(出典 村上陽一郎「文化としての科学／技術」)
(注) 本田宗一郎―本田技術工業の創業者。

- ① —の部分②、④、⑤を漢字に直して楷書で書きなさい。
- ② 熟語の読み方として、音と訓の組み合わせ方が「場面」と同じであるものは、(1)～(4)のうちではどれですか。
(1) 笑顔 (2) 夕刊 (3) 客間 (4) 未知
- ③ ①に入ることばとして最も適当なのは、(1)～(4)のうちではどれですか。
(1) しかし (2) ところで (3) むしろ (4) もちろん
- ④ ⑤に当てはまる二字のことばを、文章中から抜き出して書きなさい。
- ⑤ 「言われた」と同じ意味内容の表現を二語で書きなさい。
- ⑥ 「ひたすら……受け入れ」とあるが、この表現からうかがえる筆者の思いは何か。それを説明した次の文の⑦・⑧に入る適当なことばを、文章中からいずれも五字程度で抜き出して書きなさい。
何がわれわれの⑦であるかという問いかけもしないで、ただ⑧していることに対する憂慮。
- ⑦ 「われわれは……ことになる」とあるが、「われわれ」はなぜ「責任を感じなければならない」のか。七十五字以内で説明しなさい。
- ⑧ 「その意識」とあるが、この「意識」をもつために必要なのはどのような姿勢か。それを説明したものととして最も適当なのは、(1)～(4)のうちではどれですか。
(1) 理工系の人には科学や技術がもたらす現代社会の問題に責任ある対応をし、非理工系の人はその行為を尊重しようとする。
(2) 非理工系の人には科学技術から目を背けず、理工系の人には利便性を追求し、快適な生活空間を構築しようとする。
(3) 理工系・非理工系に関わらず、生活者一人一人が、生活空間そのものとなっている科学や技術を直視しようとする。
(4) 理工系・非理工系を問わず、すべての人々が、現代社会と融合した科学技術を目に見える形に戻そうとすること。

2

次の文章を読んで、①～⑥に答えなさい。

「月日は百代の過客にして、行きかふ年もまた旅人なり」では、未知の空間への旅のみならず、時間の流れの中を旅していくこと、あるいは時間そのものも旅であることが格調高く述べられます。この文は、それ天地は万物の逆旅^{ぎゃくりょ}にして、光陰は百代の過客なり。

(春夜桃李園に宴するの序)

という中国・唐の詩人李白のことばを下敷きにしています。これは、有名な文章を集めた『古文真宝』という中国の書物に収められており、江戸時代にかなり流布^{りゅうぷ}していて、芭蕉も読んでいました。李白の方では、天地は旅館(逆旅)、月日(光陰)は旅人(過客)という関係になっているのに、芭蕉は「月日」も「行きかふ年」も旅人だというように、同じことを繰り返して、自分の主張を強く打ち出すために、この典拠を改変していることがわかります。ただし、中国漢詩文の持っているきびきびした調子自体はそのまま芭蕉の文章に受け継がれています。読者の気持ちは自然と昂揚^{きやうやう}し、作品の中へと引きずり込まれていくのです。

続く「舟の上に生涯をうかべ、馬の口とらへて老をむかふるものは、日々旅にして旅をすみか」という一文では、船頭や馬子^{まご}のように一所にすみかを定めない人も「旅をすみか」として、そこに彼らなりの安定があることが述べられます。船頭とか馬子とか、そういう人たちは、旅行者の必要に応じて、どこへでも行かなくてはならないわけで、普通には不安定な人生だと考えられてしまいます。しかし、

芭蕉はあえて彼らのような「旅をすみかと」する生き方に肯定的な評価を与えています。そこに彼の旅への思いの強さをうかがうことができるでしょう。

以上の二つの文から読みとれるエッセンスは、芭蕉が唱えた「不易流行」という考え方につながってゆくものです。一か所にとどまらず変化していくことこそがむしろ永遠の普遍性に連なる唯一の方法だと主張しているのです。

「不易流行」は、『三冊子』という俳論などに、芭蕉の考えとして記されています。かみくだいて言うと、「不易（永遠に変わらないもの）」と「流行（時々刻々変化していくもの）」の両面性を兼ね備えていてこそ、芸術作品はそれが生まれた時代において価値を持つというものであり、江戸時代の俳諧はもとより日本文学を代表する文学理念とも言われています。

たしかに、どんな芸術作品でも「㊦」がないと人々に感動を与えることは難しいでしょう。感動のパターンというのは何千年もの歴史の中で形成されていて、人々の心性に奥深く根付いています。人間は根っこのところでは、それほど大きく変化していないのです。もつとも、「㊧」ばかりを追い求めていても、単なる模倣になってしまいがちです。ワンパターンということですから。そうならないために、その時代を生きている人が生き生きと感じられる要素を入れておかななくてはなりません。それが「㊨」なのです。

（出典 鈴木健一「知ってる古文の知らない魅力」）

① —の部分㊦、㊧の漢字の読みを書きなさい。

② 「同じことを繰り返して」とあるが、芭蕉が繰り返している「同じこと」は「李白のことば」の中ではどのように表現されているか。その表現を抜き出して書きなさい。

③ 「日々旅にして旅をすみかとす」とあるが、筆者は、この表現から芭蕉のどのような思いを読み取っているか。それを説明した次の文の㊩、㊪に入る適切なことばを、文章中からすべて八字以内で抜き出して書きなさい。

筆者は、この表現について、㊩のように一見不安定な、漂泊の人生に芭蕉が㊪を下していることを指摘し、そこに

芭蕉の㊫を読み取っている。

④ 「以上の二つの文から」で始まる形式段落は、文章全体の論の展開の上で、どのような役割を果たしているか。その説明として最も適当なのは、(1)〜(4)のうちではどれですか。

- (1) 具体的な考察から、それを発展させた論へと移るつなぎの役割。
- (2) すでに述べられた結論を受けて、その根拠の説明へと導く役割。
- (3) 前述の主張を繰り返すために、新たな具体例を補足する役割。
- (4) 一般論を否定し、筆者独自の論を述べるときの問題提起の役割。

⑤ 「不易」とあるが、ここでの「易」と同じ意味の「易」を含む熟語は、(1)〜(4)のうちではどれですか。

- (1) 簡易
- (2) 容易
- (3) 難易
- (4) 貿易

⑥ ㊬〜㊭には「不易」「流行」のいずれかが入る。空欄に当てはまることばをそれぞれ書きなさい。

3

次の文章を読んで、①〜⑥に答えなさい。

私には二十歳の成人式という日はなかった。だが、私にとって、「心の成人式」だったあの日が、いつも大切に生き続けている。

それは、私が十四歳のころのことだった。その日、私は何かほめてもらうようなことをしたのだろうか、父が夕食後「ほうびをあげるからついておいで」といった。経済学者であった父は、当時自分が勤めている大学の図書館長も兼任していた。父は家から数分のところにある大学に私を連れて行った。

大正時代の建物が夜の暗闇の中にどっしりと息づいている構内を少し歩くと、図書館の前に出た。ポケットから鍵を出しながら父は「ほうびに本を貸してあげるよ」といった。

戦争が終わってまだ三年しかたっていないかったあのころ、すべてが乏しかった。子どもの本などはほとんどない時代だった。図書館もほとんどなかった。私の町にはたった一つ、カードで本を探す閉架式の図書館があったが、子どもが近づくことなど考えることもできない存在だった。とうてい近寄ることのできない存在だと思っていた図書館の扉が、

今、私の目の前で私のために開く。緊張感でのぼせたようになっていた私を、父は閲覧室の奥に連れていき、さらにもう一つの扉を開いた。扉の向こうにはぼっかりと闇があつて、階段が地下の方へ降りていった。地下の冷え冷えとした空気と本の古いにおいが暗い穴から立ち上り、私を包んだ。父がスイッチを入れると黄色い電灯がともった。その光の中から浮かび上がったぎっしり並んだ本棚。そして、本・本・本……。父が、「自分の読みたい本を探しておいで」といった。

私は夢見るように本の中を歩き始めた。古びていかめしい学術書ばかりが並んでいたが、室の森を歩いているように私はうれしかった。

文学書が並んでいる本棚の前に出た。一冊の本が目にとまった。ボードレール『悪の華』……。私は自分が未知の世界のふちに立ったようなくるめきを感じた。ひきつけられた。私はその詩集を抱きかかえ、階段のところで待っていてくれた父のところに行つた。父は表紙を眺め、私の顔を見て、とてもまじめにうなずいた。おそらくそのとき、父の中ではこの本についての父としての感情が動いたと思う。だが父は、私を一人の人間として、私の選択をとっても大切に受け取ってくれたのであった。カウンターで父は、自分のカードを使ってこの詩集の貸し出し手続きをしてくれた。私はあのととき、自分が選んだ『悪の華』を実際に読んだかどうかすら覚えていない。くつきりと私の心の中にあるのは、あの日カードを書いた後、私に本を渡してくれた父の表情なのだ。あのととき父は、私をまぶしげに見ていた。それが、一人の人間として私が成長していくであろうことへの父の祝福であったことに、今、私は気がつく。

あの夜から数年後、四十九歳になったばかりの父はこの世を去つた。私は二十歳になっていなかった。だが父は、私に成人式をしていてくれたのだ。あの夜、「心の成人式」を。それから年月がたった。その間に日本中の人々に、図書館の扉は大きく開かれた。今日も子どもたちが本を借りる手続きをしている。それをしずかに眺めている親。小さな「心の成人式」が毎日図書館の中で行われている。

（出典 まついのりこ「あの日の空の青を」）

① 「私が十四歳のころ」とあるが、その当時の社会状況はどのようなものであったのか。なぜそのような状況であったのか分かるように書きなさい。

② 「ほうびに……あげるよ」とあるが、この時までの「私」として、図書館の「本」はどのような存在であったのか。それを説明したものとして最も適当なのは、(1)〜(4)のうちではどれですか。

- (1) お金には換えられない存在。
- (2) 豊かさの目安になる存在。
- (3) 子供の手には届かない存在。
- (4) 心を慰めてくれる存在。

③ 「私」が「図書館」に入ったときの表現について説明したものとして適当でないのは、(1)〜(4)のうちではどれですか。

- (1) 第一の扉の記述は憧れの世界へ誘われる心の高揚を表している。
- (2) 秘密めいた地下室の様子が感覚的表現によって描かれている。
- (3) 闇への恐怖を描くことで謎の世界に入るためらいを示唆している。
- (4) 重々しく並ぶ本を自由に選べる喜びが比喩で表現されている。

④ 「父は……うなずいた」とあるが、「今」の「私」が考える、当時の「父」の気持ちを説明したものとして最も適当なのは、(1)〜(4)のうちではどれですか。

- (1) 「私」の選択を意外に感じつつも、選んだ「私」を認める気持ち。
- (2) 「私」の選択に思わず驚嘆して、選んだ「私」を称賛する気持ち。
- (3) 「私」の選択を残念に思っ、選んだ「私」をたしなめる気持ち。
- (4) 「私」の選択に違和感を抱きつつも、選んだ「私」を許す気持ち。

⑤ 「それ」の指示内容を、文章中のことばを用いて十五字以内で書きなさい。

⑥ 「父は、私に成人式をしていてくれたのだ」とあるが、この表現に込められた筆者の思いを説明しなさい。